

ナサニエル・ホーソーン作品に見る無意識の諸相<II>

—「ジョン・イングルフィールドの感謝祭」の一考察—

Some Aspects of the Unconscious in Nathaniel Hawthorne's Works <II> A Consideration on "John Inglefield's Thanksgiving"

高 島 まり子

Mariko Takashima

鹿児島女子短期大学

ナサニエル・ホーソーン作品は、歴史、宗教、ジェンダーなど多様な視点からのアプローチを許容するが、筆者にとってはC・G・ユングの心理学を通して、個々の人物や事件の象徴性や元型イメージの読解ばかりでなく、エーリッヒ・ノイマンの理論¹に準拠してそれらのパーツを組み合わせ、元型的意識発達過程と照合することが有効に思われる。前稿²では短編「シルフ・エサリッジ」のヒロインの心理や登場人物の意味を読解したが、本稿ではユング心理学の「影」³や二重人格の病理などの理論をも援用し、短編「ジョン・イングルフィールドの感謝祭」について作中には述べられていないヒロインの墮落の原因を究明し、一時的な家庭への帰還の意味を考えてみたい。そうすることによってホーソーン作品の女性像全般への理解を一層深めることができると考えられるからである。

キーワード: 「太母」, 「影」, 元型的意識発達過程, 「父権のウロボロス」, 二重人格

はじめに

これまで長編『緋文字』や『七破風の屋敷』、短編「優しい少年」, 「若いグッドマン・ブラウン」, 「シルフ・エサリッジ」等を例に挙げ、ナサニエル・ホーソーン作品に埋め込まれた普遍的な元型イメージの表出や元型的意識発達過程などについて、ユングの心理学を基盤としたエーリッヒ・ノイマンの理論を用いて論じてきた。その結果、自らの「影」に抵抗する術も無く「太母」⁴的な母に抱かれて死ぬ「永遠の少年」⁵ イルブラヒム、森への「夜の航海」⁶を経て、チリングワースに投影していた「影」の「投影のひきもどし」⁷により「個性化」⁸を成し遂げるディムズデイル、「夜の航海」に失敗し「個性化」には程遠い陰惨な人生を送ることになってしまったグッドマン・ブラウン、あるいは「父権のウロボロス」⁹段階に固着して悲劇的な最期を迎える妖精のような乙女シルヴィアといった登場人物の元型的心理が浮かび上がり、作品のプロットにも新たな光を当てることができたのではないだろうか。本稿では短編「シルフ・エサリッジ」を考察した前稿に続き、短編「ジョン・イングルフィールドの感謝祭」を中心にホーソーンが描いたヒロインたちの心の旅路を更に詳細に考察していきたい。

1. 「ジョン・イングルフィールドの感謝祭」におけるヒロインの特殊性

「ジョン・イングルフィールドの感謝祭」は1840年3月発行の『ユナイテッド・ステイツ・マガジン・アンド・デモクラティック・レビュー』に初出の短編であり、1851年に短編集『雪人形』に収録された。おそらく1839年か40年初めに書かれたものであろうとされている(國重 164)。あらすじは、以下の通りである。

鍛冶屋のジョン・イングルフィールドは、暖かい自宅の炉辺で家族と共に感謝祭の夜を過ごしている。彼は自分の右隣に4ヶ月前に亡くなった妻の椅子を置き、忘れられない悲しみを大切にしている。他に牧師になった息子、ジョンの元の弟子で現在は一人前の職人として雇われているロバート・ムーア、バラの蕾のように純真で可憐な16歳の娘メアリーと一緒にいる。そこへ、妻が亡くなる前に出奔して墮落した生活を送っているもう1人の娘ブルーデンスが戻ってくる。彼女は墮落する前のような素朴で優しい姿や態度でごく自然にその場に溶け込み、最初は幽霊か幻が現れたかのように驚いて

いた家族も、次第に驚きや当惑、そして彼女の墮落という現実をも忘れたようになり、彼女の帰宅を喜ぶ気持ちに包まれる。しかし、家族で祈りを捧げる時がくると、驚き嘆く彼らを尻目に彼女は再び立ち去ってしまう。その顔は、戻った時とは別人のような罪と邪悪な情熱に燃え、恐ろしく変貌しているのだった。ところが、その同じ夜、近くの都会の劇場に集まった化粧の濃い女たちの中に自墮落な笑いを振りまくプルーデンスがいたのである。「罪ある魂は白昼夢の中で、時々ふらふらと汚れを知らなかった頃の自分へ戻ろうとするものだが、感謝祭の炉辺の訪問は、そんな夢のひとつが実現したものだったのだ。」¹⁰ (XI, 184-85) と作者は言う。

ここでホーソーンヒロインとしては他と大きな違いを見せるのが、プルーデンスである。長編では『緋文字』のヘスター、『七破風の屋敷』のフィービーやアリス、『ブライズデイル・ロマンス』のゼノビアとプリシラ、『大理石の牧神』のミリアムとヒルダ、短編では前稿で扱ったシルヴィアやアリスなど、コメディを除けば誰をとってもそれぞれの不幸や苦悩を背負って——フィービーだけは一般的な意味での不幸を背負ってはいないが——より良い道を求めて真剣に生きている。(『緋文字』のヒビズ女史は救済の見込みのない魔女として描かれているが、脇役である。) しかし、プルーデンスは敬虔なピューリタンの家庭に育ちながら墮落して——おそらくは売春婦になって——しまい、それを謳歌しているかのような「自墮落な笑いを振りまく」(XI, 184) ヒロインである。若く美しく家族の愛に囲まれていたはずの彼女に、いったい何が起こったのであろうか。

また、彼女の墮落した現在の姿と素朴で優しい娘として家族のもとに戻った姿との対比が、非常に際立っている。作者は、「罪ある魂は白昼夢の中で、時々ふらふらと汚れを知らなかった頃の自分へ戻ろうとするもの」で、この感謝祭の出来事は「そんな夢のひとつが実現したもの」だと結論づけるのであるが、これは心理学的にはどう解釈できるのであろうか。この2点を手掛かりに、彼女の人物造型の意味を考えてみよう。

2. ノイマン的意識発達過程におけるプルーデンスの位置づけ

まず、本作を読んで気付くのは、家族——特に家族の大黒柱である父親、ジョン・イングリフィールドとヒロインであるプルーデンス——の心に占める亡き妻（プルーデンスにとっては母親）の存在の大きさである。冒頭からジョンの右隣の主のない椅子のこと、そして妻の死と夫の悲しみが語られる。プルーデンスも母の死を告げられると、帰宅した際に暖炉の火に目が眩んで「この椅子にお母さんが座っているように思ったの！」(XI, 181) と答えるのだ。

同時に、プルーデンスと母親の相似性、あるいは一体性も暗示される。彼女は、帰宅するなり「わざわざ自分のために取っておいてくれたかと思っているかのような態度」(XI, 180) で亡き母の椅子に座り、厳格な父親もそれを咎めることはない。また、父親ジョンにとっても、出奔する前と同様の彼女の素朴な衣服や髪型、優しい表情は、「墓に眠っている妻に生き写し」で「結婚して初めて過ごした感謝祭の日の妻の姿」(XI, 181) なのだとして作者は語る。そして、彼は8時に飲む習慣のハーブ・ティーを煎じてくれたプルーデンスに「母さんがいなくて、みんな寂しいんだよ、プルーデンス・・・母さんは、いま、ここにいるはずだ、そんな気がする」(XI, 184) と、しみじみ語りかけるのである。これらの記述から、妻への愛情と共に、妻とプルーデンスを同一視しようとする彼の気持ちが読み取れる。

ここで、前稿で分析した「シルフ・エサリッジ」のシルヴィア、および『七破風の屋敷』に挿入されたアリス物語のアリスの悲劇を思い返したい。前者は、圧倒的で強大な男性的無意識の力——後見人たる「独身の年取った伯父」(XI, 112) に象徴される支配力と、その閉塞状況を「暗闇の楽園」¹¹ に反転させる空想世界の理想的恋人像の魅力——に囚われて現実の婚約者を受容られなかった。後者は、家父長的女性観に基く父親への従順さ、あるいは処女の無垢と聖性というジェンダー意識に囚われ、マシュー・モールの魔力を喚起することになり、その犠牲となった。アリスもシルヴィアも、「太母」段階の無邪気な女性が未知の圧倒的で強大な男性的無意識の力に捕えられ、征服される「父権的ウロボロス」段階への固着という問題を抱えていたと言えよう。エーリッヒ・ノイマンによれば、女性の場合の元型的意識発達は、無意識の力が圧倒的なウロボロス段階——「太母」に依存している前半の「自己保存」¹² 段階と、後半の「父権的ウロボロス」段階から成る——から、徐々に意識性が強まり個人的意識が独立する父権段階へと進むという(『女性の深層』5-42)。そして女性は、「父権的ウロボロス」段階で「太母」の支配下から奪い取られ、自己保存から自己放棄という新たな心理段階に至ることで、完全に受身的な女性としての自己認識を獲得するのだという(29)。

さて、母親についての記述がほとんど無く、強固な男性性の支配圏に住んでいる上記のシルヴィアとアリスの状況と比較してみると、プルーデンスの場合は、まるで自分のもののように母の椅子に自然に腰掛けたり母の姿を幻視したりと、

母親との非常に強い絆を示唆する記述が多い。即ち、彼女には、いまだに母性的な無意識との一体感を維持している「太母」段階の心理が色濃く残っていると思われるのだ。しかしながら、現実には母親は既に他界しており、夫のジョンが「内々の集まりにあっては中心人物」(XI, 179)としてその場に君臨していることは注目しなければならない。つまり、プルーデンスの母の死／不在は辛いことであると同時に、家庭においては母性的力の衰退を、またプルーデンス本人にとっては母性との一体化に安住していた「自己保存」段階の終わりを示していると言えよう。そしてそれに呼応するように、父親が家庭を支配し、妻の不在を埋める方向性で娘の位置づけを決め、自らが君臨する閉塞的世界に無意識的に彼女を閉じ込めようとする図式が透けて見えるのである。

女性にとって「太母」／「自己保存」段階の特色は、「同一視」の関係の強化、「女性的なものとの一体化」、そしてそれに伴う「男性的なものの排除とそれへの冷淡さ」だという(『女性の深層』19-21)。ただし、恋愛感情を示すロバート・ムーアに対してまんざらでもないプルーデンスの様子から、「男性的なものの排除」は家庭に戻った時の彼女には当てはまらないと思われる。しかし、だからといって、彼女が男性と個人的な愛情関係を結ぶほど女性として心理的に成熟しているかという、そうも言えない。ロバートに対する彼女の対応は甚だ曖昧で、彼女は彼のことを「昔のともだち」(XI, 182)と呼んでいる。問題は、男性とはいえ彼より父親との関係性の方が強く前景化されていることである。既述したように、父親のジョンが妻亡き後は妻への愛情を娘であるプルーデンスに注ぎ、妻と娘の同一視を強めている様子をはっきりと伺える。しかも、娘の恋人にふさわしく思われるロバートは、最初からジョン自身の実の息子より息子らしく見えるというのであるから、この家庭における父親としてのジョンの支配力は絶大である。たとえジョンがロバートをプルーデンスの夫として認めたとしても、ジョンによく似たロバートには彼女の個人的な男性パートナーとしてより、むしろ彼女の父親代理としての役割の方が似合っているようである。そして、一人の女性としてではなく、父親の愛情の受け皿としてのプルーデンスの役割が強く打ち出されているのだ。もう一人の娘であるメアリーが彼女と双子の姉妹であり、現在も心優しく純粋で可憐な乙女であるにも拘らず、である。どうやら父親の愛情はプルーデンスに固着しているらしいし、それを彼女自身も無抵抗に受容れている様子である。

しかしながら、彼女を妻に生き写しだと感じ、その姿を新婚時代の妻のイメージに重ねるジョンの視線は、父と娘の近親相姦を連想させるような過度の親密さを印象付ける。この状況は、アリスやシルヴィアと形は違っているが、やはり圧倒的な男性的無意識の力に支配されるプルーデンスの「父権的ウロボロス」段階と言えるのではなからうか。アリスたちの場合より「太母」段階の心理が強調されているため、それに続く「父権的ウロボロス」への移行が逆に可視化されると言えよう。即ち、帰宅したプルーデンスは、独立した個人としての意識的存在を主張するのではなく、「太母」段階の無意識性を維持しつつ、亡くなった母親の代理として父親の愛に支配される「父権的ウロボロス」段階に囚われていると言えるのではなからうか。ノイマンは、「父権的ウロボロス」は個人的次元では精神分析が「エディプス・コンプレックス」の女性版として扱う問題を引き起こすことが多く、その場合、父との近親相姦という空想の背後に娘の「父権的ウロボロス」との関係という元型的配置があると述べる(『女性の深層』30)。プルーデンスの場合は、彼女自身というより父親の心理を通して、この意識発達段階の状況が描かれているようである。

したがって問題は、その地点から彼女がどのようにして自我の確立に至り、個人として独立できるか否かであろう。ノイマンの理論における本来の女性の意識発達では、女性は「父権的ウロボロス」の牢獄から彼女を解放する父権的な「英雄」の役割を果たす男性との個人的な出会いによって、初めて父権制結婚の段階に進むことになるという。むしろ、それがそのまま女性の幸福な「個性化」に繋がるというわけではないが。プルーデンスの場合、このままでいけば、たとえ彼女が改心して家庭に留まりロバートと結婚したとしても、彼女が亡き母の椅子に座ったように、将来はジョンにそっくりのロバートが彼の椅子に座ってその位置を受け継ぐに違いない。つまり、彼はジョンに代わってこの「父権的ウロボロス」世界の主となってしまい、彼女を解放してその意識発達を助ける「英雄」にはなれそうもないのである。そこには二人の個人的な意識発達は望めず、ジョン夫婦の人生を繰り返す代理カップルの人生しかなく、父母の人生の再生産イメージが濃厚で、プルーデンスの「父権的ウロボロス」段階への固着は解消されようもない。

それにしても、母性を備え、家族皆から愛されながら、どうして彼女は墮落への道を迎えるに至ったのであろうか。また、彼女にとって「父権的ウロボロス」の超克と現在の墮落とはどのような関係にあるのであろうか。ユング心理学における「影」の意味と関連付けて考えてみたい。

3. ブルーデンスとユング心理学的な「影」

さて、冒頭の炉辺を囲む家族は、「みんな黙って座っているが、影の方は背後の壁で踊っていて、法外なお祭り騒ぎを楽しんでいるように見えなくもない。」(XI, 179)と描写される。優しかったであろう母親の死から4ヶ月しか経ていない家族にとって、この感謝祭は彼女の不在を痛感させる辛く寂しい状況であろう。それにふさわしくないように見えるこの記述は、何を意味しているのであろうか。実は、短編「ウェイクフィールド」にも同様な既述がある。20年もの意味不明な不在の後に自宅に戻ろうとするウェイクフィールドの目に映ったものが、暖炉の火に照らし出された妻の楽しげに踊っているかのように見えるグロテスクな影であった。天井に映った影は、「大きな腰が誇張された見事な漫画」(IX, 139)に見えた。逞しく楽しげな彼女の影のダンスと、それを夜の雨に濡れながら侘しく見上げる孤独で痩せた夫の対比は、強烈である。この描写は、意識面では敬虔で貞淑な妻にも意外に放埒な無意識内容が隠されていることを暗示しているかのようで、踊る影はそのままユング心理学における個人的な「影」を象徴するように思われる。更に元型的な視点を持ち込むとすれば、妻の豊かな腰が強調された踊る影を通して、夫の出奔という不幸に打ちひしがれていたはずの彼女が、無意識の深層では頼りない子どものような夫の生死を司る生命力に溢れた強大な「太母」のように見えるのだ。ここには意識と無意識の乖離、更には無意識の深層における加害者と被害者の立場の逆転が暗示されていると言えよう。同様に「ジョン・イングルフィールドの感謝祭」においても、炉辺の家族の楽しげな影の描写は、登場人物の意識と無意識の乖離、更には日常での姿と無意識に潜む「影」との対立が示唆されていることを予感させる。即ち、意識面では寂しく悲しい母親の死／不在にも拘らず、逆に自由を謳歌している無意識の心理が暗示されているというのは言い過ぎであろうか。また、家族がブルーデンスの帰宅を喜ぶ気持ちになった時点にも、「朝のうちであれば、おそらく違った目で見ただことでしょう」(XI, 183)と述べられる。この記述もまた、理性や意識が覚醒する朝と情動や無意識が活性化する夜を対比させ、両者の乖離を示唆しているのである。

このように意識面の現象の深層に意外な無意識の内容が隠されていることを前提とする視点から見ると、双子のメアリーとブルーデンスは、実際の双子の姉妹という意味の裏に女性の無垢や美德というピューリタンの・家父長的価値観と、その裏に隠された「影」である性的欲望や悪徳という対立項の象徴としての意味を含んでいるのかもしれない。ノイマンは、独立に向かう未熟な自我が無意識の脅威と闘う内的分裂の段階を象徴する神話的イメージとして、対立する双子を挙げている。(『意識の起源史』157-63)メアリーは、「人の心の蔓がもう一度絡みあう」ことを願う「罪ある人(ブルーデンス)と同じ茎と一緒に育った薔薇の蕾」(XI, 182)と表現される。この対照的な双子という設定が人間の内的分裂を象徴するとすれば、二人を産み育てた母親はその内的分裂を備えた存在として意図されているのが自然であり、決して夫が愛した素朴で優しい女性とばかりは言えないはずである。したがってブルーデンスの純粋さと邪悪さの二面性もまた、母親の二面性を受け継いだものであり、彼女の墮落は、生前は隠されていた母親の「影」の表出とも考えられるのだ。

そうしてみると、ジョンの思い描く貞淑で優しい妻のイメージは、厳格なピューリタンであり無骨な鍛冶屋である彼の独りよがりな幻想に過ぎなかったとも言えよう。意識面では抑圧されていた妻の「影」は、娘の墮落という過激な形で生き直されているのかもしれない。河合隼雄は、抑圧されていた「影」が一挙に反撃に転じる「影の反逆」について論じ、集団の「影」の場合はナチスの台頭を、個人的「影」の場合は様々な症例やシェークスピアの『マクベス』の主人公の破壊を例に挙げている。また、立派な教育者の子どもが手の付けられない放蕩息子や犯罪者である場合を例示して、本人は「影の反逆」と無縁に見えても、身近な家族などがその個人の「影の肩代わり」をさせられている場合が多いと述べる(『影の現象学』53-56)。したがって、ブルーデンスが母親の「影」の肩代わりをしている可能性も考えられるのである。仮にそうならば、ブルーデンスは厳格なピューリタンの父権的価値観で育てられ、「父権のウロボロス」段階において父親から母娘同一視の圧力を押し付けられ、自らの「影」と母親の「影」を二重に背負い、母親の「影」の肩代わりも含めて「影の反逆」に屈してしまったとも考えられるのではないか。彼女は「もともと鋭敏で傷つきやすい感受性の持ち主」であり、陽気な振舞や言葉にも「哀感がしみわたっている」(XI, 183)と描写される。そのような繊細な性格ならば、「影」の猛威に屈服したとしても不思議ではなからう。彼女の出奔と墮落を、そのように解釈することはできないであろうか。

しかも、その「影の反逆」に肯定的な意味が含まれ得ることを見逃してはならない。『緋文字』のヘスターの姦通を、チリングワースの知的「暗闇の楽園」と共同体の霊的「暗闇の楽園」という2種の「父権のウロボロス」の閉塞的支配圏(女性を無意識段階に閉じ込め、自我の独立を阻む父権的な支配圏)から脱出せんとする「太母」的な「影」の声に従った「太母の反逆」¹³であり、意識性に向かう契機となったとする私見¹⁴に沿って、ブルーデンスの墮落にも別の見方が可

能かもしれない。姦通を父権的価値観を否定する情念の爆発として肯定する「太母」的視点と、単なる罪として否定する父権的視点をヘスターが共に超克し、個人の意識性を獲得する契機としたと考えるならば、ブルーデンスの墮落もまた意識性に向かう建設的方向への一里塚とみなすことができるのではないか。伝説のプシケー¹⁵が姉たちの悪意に満ちた助言に従って、眠るエロースの正体を見極めるために無意識の暗闇に灯りを点した行為（ノイマン『アモールとプシケー』82-97）と同様に、つまり、ブルーデンスが母親の「影」の肩代わりも含めて「影の反逆」に一度は屈服しても、父の君臨する「父権的ウロボロス」の暗闇から脱出し、自分なりの解決策を見出して新たな道を歩むことができれば、ヘスターのような成熟に至ることも可能であろうとする肯定的な視点である。確かに本作にはそのような道は一切暗示されることなく、彼女が「太母」的な「影」に呑み込まれた形で終わっている。しかし、性的罪という＜太母の反逆＞に進まざるを得なかったヒロインの造型は、代表作『緋文字』のヘスターに繋がるものとして注目すべきであろう。

ここでこれまで扱ってきたヒロインたちの「影」への対応を振り返ってみると、「シルフ・エサリッジ」のシルヴィアは「父権的ウロボロス」への固着が強すぎて、エドガーの突きつけた現実を直視し自らの「影」と直面することは最後までできなかった。『七破風の屋敷』のアリスには、処女に無垢と聖性を押し付け階級意識を植え付ける家父長的価値観の意識と、意識化されていない性的欲望と差別感という「影」との隠された対立があり、マシュー・モールの催眠術によって彼女は自らの「影」に否応なく直面させられてしまったと言えよう。そして魔法使いに支配される苦悩の末に自らの「影」を意識内に受け入れることができ、死と引き換えではあったが傲慢さが消えて愛に溢れた謙虚な性格に成長したのである。太母段階の女性が「父権的ウロボロス」との心理戦の末に自らの「影」を意識化し得たアリスと、現実に性的罪を犯して共同体の非難を浴びた末に「個性化」を果たしたヘスターには、苦悩の末の意識発達という共通項がある。ブルーデンスは「父権的ウロボロス」段階への固着に疑問すら持たないシルヴィアからアリスと同じく一步前進しながらも、「父権的ウロボロス」への無意識的な抵抗の結果「影」に呑み込まれ、現実の墮落によって家族や世間の非難を浴びる。彼女はアリスとヘスターの暗い部分を繋ぎ、「個性化」の困難さを前景化するヒロインとして位置づけられると言えよう。

4. ブルーデンスの帰還の心理学的意味

ところで、彼女の墮落した現在の姿と素朴で優しい娘として家族のもとに戻った姿との対比は、非常に際立っている。作者は、「罪ある魂は白昼夢の中で、時々ふらふらと汚れを知らなかった頃の自分へ戻ろうとするもの」で、この家庭への帰還は「そんな夢のひとつが実現したもの」だと結論づけるのであるが、実際はどうだったのであろうか。彼女はなぜ帰還したのか、心理学的解釈を試みたい。

既述したように、シルヴィアもアリスもブルーデンスも「父権的ウロボロス」段階への固着のゆえに「影」の統合に困難を極めた。しかし前二者とは違い、帰還したブルーデンスは作品の冒頭から自分の墮落を自覚し、罪意識を持っている。だからこそ、あの世で再会したいという兄の言葉に顔を曇らせ、慌てて握られた手を引っ込め、純真無垢な双子の妹メアリーが懐かしさのあまり飛び出して彼女を抱きしめようとする、素早く拒絶の身振りをしながら「だめよ、メアリー……私に触っちゃダメ。あなたの胸を私の胸に押し付けてはだめ！」(XI, 182)と叫ぶのだ。また、彼女を愛しているロバートが彼女に駆け寄り、手を取ってその手を自分の胸に押し当てると、手を引っこめながら「あったかすぎる歓迎はいけないわ」(XI, 183)と悲しげに微笑みながら牽制する。いずれも、自らの罪ゆえに彼らの歓迎に値しないことを自覚すると共に、罪が愛する人々を汚染することを恐れての行動に違いない。つまり、このブルーデンスを未熟ながらも彼女の自我とすると、自我が「影」を自覚しているのであり、家庭への帰還は「影」からの逃亡と言えるかもしれない。

同時に、その「影」に善の可能性を見出して自我に統合しようという努力は、彼女には残念ながら見えない。それどころか、上記のように単なる罪として否定する父権的視点に囚われている。家族で祈りを捧げる時間がくると、彼女の顔に罪と邪悪な情熱が燃え上がり、別人のような恐ろしい変貌を遂げ、彼女は「悪魔」(XI, 184)——彼女の「影」を象徴すると考えられる——との戦いに再び敗北し、「影」に呑み込まれた形で立ち去るのだ。家族の驚きや悲しみをあざ笑うかのような勝ち誇った笑みは、彼女の墮落が意識発達過程における積極的意味を持つ可能性のある＜太母の反逆＞であったとしても、それは罪の自覚以上の意識性への前進には繋がらず、＜太母の反逆＞への固着という形をとった「影」への敗北に終わってしまったことを示す。

しかし、逆に墮落したブルーデンスを彼女の自我と捉えるとどうなるであろうか。語り手に従ってこの帰還を彼女の「白昼夢」の実現と考えると、自我から——河合が「白い影の投影」(『影の現象学』50)として説明している——「白い影」が勝手にさまよい出たかのようなのである。即ち、当事者が常識的には善とされるような面を抑圧して生きている場合、

彼の「影」は通常とは逆に善や光を象徴する「白い影」なのである。そして、彼女の「白い影」は墮落した黒い自我のことを明確に認識しているが、後者は前者を「白昼夢」の中でぼんやり認識しているに過ぎない。自我の抑圧が強ければ「影」はより暗く強力になり、その結果「影」が自我の制御を超えて現実に勝手に行動する現象は二重人格と呼ばれる。河合は、1957年に発表されたイヴ・ホワイトとイヴ・ブラックの症例を挙げて、この現象を説明している。あまりに控えめで感情を押し殺した聖女のような女性に、全く逆の遊び好きで不道德な魔女のような別人格が現れた例で、治療者は対照的な2つの人格をイヴ・ホワイトとイヴ・ブラックと名付けたという。前者はこの女性の本来の性格で最初は後者の存在を全く知らず、その奔放な行動の結果に振り回され治療を受けて両者が互いを認識し、紆余曲折の末に共に消滅し、新たに統合された人格が生まれて治癒に至ったという。(『影の現象学』97-107) プルーデンスの帰還も、「影」に敗北した自我から見れば「白い影」の一人歩きと考えられ、逆に帰還した彼女が本来の自我ならば再度の墮落は「影」の勝手な反逆となり、いずれにせよ二重人格の現象に似ている。ホーソーンには珍しく、病的レベルに達したヒロインの意識と無意識の乖離を活写していると言えよう。墮落した姿への恐ろしい変貌など、イヴ・ホワイトがイヴ・ブラックに変貌する様子を髣髴とさせるような迫力である。ユングは全人格のバランスのとれた発達を目指す人生後半の人格形成を「個性化」と呼び、ノイマンはそのような傾向が意識発達の最初期から既に見られると考え、それを「中心志向」¹⁶と名づけた。そして、両者とも病的な現象にも全人的発達を促す無意識的な必然性が見出されると考えたが(河合『ユング心理学入門』219-22, ノイマン『意識の起源史』76-80)、プルーデンスの墮落に見られる「影の反逆」、あるいは帰還に見られる病理性は、この傾向を示しているとも言えよう。まるでイヴ・ホワイトとイヴ・ブラックのように対照的な人格——自我と暗い「影」、あるいは「太母」的な「影」に呑み込まれた自我と「白い影」——の対立が彼女の意識発達過程における内的分裂を露呈し、両者の統合の必要性を訴えているかのようである。

それにしても、ホーソーン作品において、ここまで明確に一人の女性の中での自我と「影」との対立が可視的に描かれたものは他に無い。シルヴィアとアリスにしても、「影」は文字通り美しい自我の表層の底に隠れてははっきり見えることはない。その意味でも、プルーデンスは注目し値するヒロインである。当時のホーソーンは、内的分裂のテーマに強く惹かれていたのだろうか。というのも、本作の3年前の1837年初出の短編「ムッシュー・デュ・ミロワール」には、一人称の語り手と瓜二つの、その名も「ミロワール(鏡)」と称する人物との交流が描かれるからである。ただしこれは、二重人格というよりも一人の自分と出会う「二重身」¹⁷体験と呼ぶ方が妥当な不思議な内容である。いわば無意識の太母段階から自我誕生に向かう途上のナルキッソス¹⁸の心理段階を思わせるような、自分の鏡像との遭遇と交流の記録なのだ。ムッシュー・デュ・ミロワールは邪悪な性格でもなく、語り手との関係も決して対立ではないので「影」には当たらない。したがって、プルーデンスの「影」の持つ強烈な迫力はないが、当時のホーソーンには、自分自身を深く探求する心理、あるいは自我確立や再生に向かう心理等に見られる内的分裂傾向への関心が強く働いていたと言えるかもしれない。

ただしプルーデンスの場合、冒頭の家族の「影」の描写を勘案すると、彼女の帰還は彼女個人の心理のみならず、家族全体の無意識の深層を炙り出す役割を果たしているとも考えられる。ヘスターの姦通がピューリタン共同体の暗い体質を抉り出し、最終的には彼女自身の成長によって共同体の再生に繋がったように、プルーデンスの罪と帰還も家族の深層心理と深い関わりがありそうである。ピューリタンの価値観で家族を統制・支配する——19世紀当時の帝國的アメリカ合衆国を象徴するような——父親、自らの「影」を抑圧したまま良き母として亡くなった帝国の理想の母親像のような妻、両親の価値観に何の疑問も抱かずその再生産に励む双子の片割れと父の弟子、両親の価値観を更に異国に広めようとしている、「明白なる天命」¹⁹に献身するような兄、といった家族に象徴される当時の米国に内在する「影」の世界が明らかになる。恐らく彼らはプルーデンスの自由な意識発達を善意と愛情で押し殺し、それに誰も気付いていない。集団の「影」を引き受ける「犠牲の羊」のように、プルーデンスが家族の、そして比喩的には19世紀米国の「影」を押し付けられた存在の象徴である可能性も否定できないのではないか。むしろ、作者がそこまで意識していたか否かについては更なる研究の余地があるであろう。

結論

以上でプルーデンスの出奔と墮落を、「父権的ウロボロス」段階において父親から母娘同一視の圧力を押し付けられ、自分と母親の「影」を二重に背負い、母親の「影」の肩代わりも含めて「影の反逆」に屈してしまった結果であると同時に、その「影」への敗北をプシケーの場合と同様(私見によればヘスターの姦通とも同様に)「暗闇の楽園」を脱出して意識性に向かう契機である<太母的反逆>として肯定的に解し得ることを考察した。また一時的な家庭への帰還は、個人

的心理としては「影」からの逃亡,あるいは「影」に敗北した自我の視点からは「白い影」の一人歩きという二重人格の現象に似ており,自我と「影」の統合の必要性を訴えているように見える。更に,彼女が作中の家族,および比喩的には19世紀米国の文化的・国家的な集団の「影」を押し付けられた「犠牲の羊」の象徴である可能性も否定できないのではないか。そうであるならばホーソーンは,表面的には放蕩娘の墮落と家族の不幸という悲劇を描きながら,深層では集団の「影」を押し付けられたヒロインの悲哀を描くことで,19世紀米国の価値観や国家戦略を痛烈に批判していることになるのかもしれない。

<注>

1. エーリッヒ・ノイマンの理論:神話の登場人物や事件をユング心理学の立場から解釈し,それらを組み合わせて人類の元型的意識発達過程が象徴されていると論じた。男性の場合は,無意識→「太母」→「原両親の分離」と「英雄」の誕生→「竜との戦い」→「乙女の救出」と「宝」の獲得に象徴される自我確立に至る過程が見られるという。女性の場合は,無意識→「太母」→「父権のウロボロス」→「英雄」による救出→父権制結婚の過程を経るのが一般的であるが,プシケーのように自ら「原両親の分離」→「竜との戦い」を成し遂げる「英雄」もある。(『意識の起源史』,『女性の深層』,『アモールとプシケー』にこれらの理論が展開されている。)
2. 前稿:『ホーソーン作品に見る無意識の諸相——「シルフ・エサリッジ」の考察——』(高島まり子 鹿児島女子短期大学紀要 第48号)以後,この論考を「前稿」と称す。
3. 「影」:意識に取り入れられず,生きられなかった人格の半面を意味する。(河合隼雄『影の現象学』30)
4. 「太母」:「自我が自らをウロボロスとの同一状態から切り離し始め」無意識を破壊と創造の二面性を持つ両義的な「太母」(「貪り食う悪い母」と「養う良い母」の二面性)として体験する自我の幼児期から少年期のシンボル。良き母に寄り添う幼児から両義的な母への抵抗や「恐ろしい母」への反抗を試みる少年のシンボルによって象徴される。(エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史』81-163)
5. 「永遠の少年」:ギリシアにおけるエレウシスの秘儀における少年神,イアカス(イアッコス)——ディオニュソスの分身で,冥界の女王ペルセポネーの息子——を指すが,彼は死と再生を繰返す穀物の姿の具現として登場し,「成人することなく死に,太母の子宮の中で再生し,少年として再びこの世に現われる。<永遠の少年>は決して成人しない。」(河合『母性社会日本の病理』21)
6. 「夜の航海」:太陽の循環に対する諸民族共通の心理的反応を示す太陽神話の縮図の下半円を,ユングは以下のように描いている。「毎朝,神の英雄が海から生まれる。彼は日の車に乗っている。西の方では偉大なる母が彼を待ち構えていて,夕暮れになると彼は母に呑み込まれてしまう。彼は竜の腹にはいって真夜中の海の深淵を横断する。夜の蛇と恐ろしい戦いを交えたのち彼は朝また甦る。」(元田脩一 85, C.G.Jung, Vol.8, 153)これは,英雄の死と再生を象徴する元型パターンで,自我が無意識の深みに下降し,死を経た後に無意識から新たな心的エネルギーを供給されて意識面に再生するまでの人類共通の精神的再生過程を象徴する。この過程は意識と無意識の統合を目指す「個性化過程」の象徴的表現の一つでもある。
7. 「投影のひきもどし」:自分の内部にあるコンプレックスを認知することを避け,それを外部の何かに投影し,外的なものとして認知することを「投影」と言うが,現実と投影内容の差異に気付くことから自分のコンプレックスを認知し,その内容を自我の中に統合していくことが「投影の引き戻し」である。(河合『ユング心理学入門』75-76)
8. 「個性化」:ユングは「私は『個性化』という言葉,人が心理的に『個』となるプロセス,即ち独立し,それ以上分割し得ない統合体,『全体』となるプロセスを表すために用いている」と述べている。無意識の中の様々な内容を意識化し,人格全体として調和的な統合を保ちながら,意識と無意識を含んだ心の全体性の中心たる「自己」に従って個人に内在する可能性を実現していくプロセスを「個性化過程」といい,人生後半の人格形成を特徴づける。(河合『ユング心理学入門』220-21,ノイマン『意識の起源史』678,704)
9. 「父権のウロボロス」:女性的な意識発達過程の「太母」に続く段階で,いまだ「太母」的な無意識の内に保護されていた乙女の意識に,圧倒的で異質な無意識内容が侵入する段階。受身的な女性としての自己認識を獲得する段階,あるいは侵入する男性的な無意識内容そのものを指す。(ノイマン『女性の深層』24-35)
10. ホーソーン原作のテキストからの引用は全て下記の全集からのものであり,括弧内に巻数はローマ数字で,ページ数はアラビア数字で示す。
Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, Roy Harvey Pearce and Claude M. Simpson. 23 vols. Columbus: Ohio State University Press, 1962-97. 日本語訳は『ナサニエル・ホーソーン短編全集Ⅱ』(國重純二訳 南雲堂, 1999年)を参考にさせていただいた。
11. 「暗闇の楽園」:英雄を飲み込む「竜」の変形で,飲み込まれる危険は退行的な快楽によって隠されている。(ノイマン『アモールとプシケー』81,186)
12. 「自己保存」:「女性の自我が母性的な無意識や母性的な自己といまだ結ばれたままでいる段階」(ノイマン『女性の深層』19-24)
13. <太母の反逆>:「太母」段階の無邪気な女性が「父権のウロボロス」の圧倒的な力に身を任せ,それを受容している限りにおいて,彼女は「暗闇の楽園」での恍惚状態にある。しかし,同時に「太母」的な女性性は,このような男性性への隷属に抵抗し,この状態

を破壊せんとする。そのような無意識の「太母」的な「影」に従って行われる逆行行為を、ノイマンの説を踏まえて筆者がこう呼ぶ。

14. 私見：『緋文字』における「夜の航海」——ヘスターとディムズデイルの「個性化過程」——（鹿児島女子短期大学紀要 第36号，2001.）「神話的イメージの連鎖——ヘスターとディムズデイルの「夜の航海」を中心に——」（鹿児島女子短期大学紀要 第38号，2003.）に述べた。
15. プシケー：エロース—プシケー神話のヒロイン。彼女は神託によって姿の見えない怪物と結婚したが、彼の禁止を破って明かりを灯し、夫が神エロースであることを知る。傷つき怒って「太母」アフロディーテのもとに飛び去った夫を追って、「太母」の出す困難な4つの課題を果たす。最後に冥界下りの課題を与えられ、ペルセポネーの美の箱を運ぶ途中、禁を破って箱を開け死の眠りに捕えられるが、エロースによって救われ、女神となって娘を産む。（ノイマン『アモールとプシケー』3-59）
16. 「中心志向」：外界や内界の対象との対決による意識発達と別に、「自己」に関係づけられた自己形成、即ち人格の構築と拡張に重点を置き人格の全体性を達成する発達の方向。（ノイマン『意識の起源史』76-80）
17. 「二重身」：自分が重複存在として体験され、「もう一人の自分」が見えたり、感じられたりすること。（河合『影の現象学』73-89）
18. ナルキッソス：圧倒的な無意識を象徴する「太母」から独立しようとする未熟な自我は、逃亡・自己去勢・反抗の末に敗北する。ナルキッソスもその神話的表現の一種であるが、ニンフに姿を借りた「太母」の愛を拒否し、水に映った自分の姿に恋焦がれて死ぬ彼は「自分自身を意識化し始めた自我と意識・・・が自らを鏡に映そうとする傾向」を示し、「人類に課された認識（発達）の必然的な一段階である」という。（ノイマン『意識の起源史』149）
19. 「明白なる天命」（Manifest Destiny）：神によって与えられた北米大陸全体を合衆国が支配するのは神の摂理であり、西部開拓や共和制、ピューリタニズムの普及等が神の定めた宿命であるとする米国の国民的信念を、ジョン・L・オサリヴァンが1845年に『デモクラティック・レビュー』紙上でこのように表現し、米国の領土拡張の欲望を正当化する標語として広く用いられることとなった。（巽孝之 82，大下他 88-89）

<引用文献>

- Hawthorne, Nathaniel. IX: "Wakefield", *Twice-told Tales*.
- Hawthorne, Nathaniel. XI: "John Inglefield's Thanksgiving", *The Snow-Image And Uncollected Tales*.
- Hawthorne, Nathaniel. XI: "Sylph Etherege", *The Snow-Image And Uncollected Tales*.
- Jung, C.G. *The Collected Works of C.G. Jung*. Ed. Sir Herbert Read et al. 20 vols, Princeton, N.J.: Princeton UP, 1967-78.
- エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史』上・下 林道義訳，紀伊國屋書店，1984.
- エーリッヒ・ノイマン『アモールとプシケー』河合隼雄監修 玉谷直美・井上博継共訳，紀伊國屋書店，1989.
- エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男訳，紀伊國屋書店，1980.
- 大下尚一他『史料が語るアメリカ』有斐閣，1989.
- 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館，1967.
- 河合隼雄『影の現象学』講談社，1990.
- 河合隼雄『母性社会日本の病理』中央公論社，1976.
- 高島まり子『『緋文字』における「夜の航海」——ヘスターとディムズデイルの「個性化過程」』鹿児島女子短期大学紀要 第36号，2001.
- 高島まり子「神話的イメージの連鎖——ヘスターとディムズデイルの「夜の航海」を中心に」鹿児島女子短期大学紀要 第38号，2003.
- 高島まり子「ホーソン作品に見る無意識の諸相——「シルフ・エサリッジ」の考察——」鹿児島女子短期大学紀要 第48号，2013.
- ナサニエル・ホーソン『ナサニエル・ホーソン短編全集』國重純二訳，南雲堂，1999.
- 巽孝之『アメリカ文学史——駆動する物語の時空間——』慶應義塾大学出版会，2003.
- 元田脩一『エデンの探求——アメリカ小説の一特質』開文社，1972.

(2014年12月3日 受理)